

114  
A5067

二月九日在獨青木公使ヨリ慶被達ス暗師沈澄多  
 明瞭ナラス候得共臆測スル處尤ノ通  
 千八百六十六年取結相成タル税則條約改正ノ為  
 歐洲各國本邦ト  
条約同并本邦ヨリ全權公使ヲ派出シ倫  
 敦ニ於テ會議ヲ開キ度旨英政府ヨリ獨乙政府  
 業内イタシタル由、慶獨ハ之ヲ承諾シタリ日本政  
 府ヨリハ速ニ右ニ付論議ヲ議定スヘキ全權公使ヲ  
 派出アルベシ五月ノ朔ニ於テ其奉ヲ奉ルニ方リテ  
 獨政府ハ予カ其席ニ臨マンテラ清ヒ且日本在獨  
 乙公使ヲモ共ニセンテラモ求メリ

小  
務  
目



114  
A50  
2

貴我兩國條約改正ノ件ニ付去ル五月四日附批  
 翰へノ貴答トシテ本月二日附貴翰致領收候陳  
 者貴政府ニ於テハ我政府該條約改正ヲ請求ス  
 ルノ権理ヲ充分ニ認許相成某体裁ノ通知ヲ得  
 ラル、上ハ我財政上ノ要用並ニ關係者一般ノ  
 利益ノ為メニ至當タルベキ分ハ我政府ノ意ニ  
 應センヲ切望シ我政府ノ改正案ヲ熟考致サ  
 ルヘキ旨御報之趣致承知候然ルニ右通知一條  
 ノ論ハ姑ラク之ヲ措キ貴政府ニ於テ斯ク厚意  
 ヲ表セラル、段實ニ喜悅ノ至リニ堪エス尤モ

卜  
務  
省

校  
 石島  
 田川  
 胤  
 昇則

初ヨリ其然ルヘキヲ期セカリシニハ非ハト  
虽且我政府之ヲ開カハ満足スル所ニ可有之依  
テ公然可及通達ノ處貴政府ニ於テハ今回ノ改  
正ニ付我政府ノ政畧ヲ誤解シ論ヲ立テラル、  
ノ意判然タルニ由リ拙者ニ於テ其誤解ヲ正ス  
ノ答辨ヲ為スハ拙者ノ職務タリ借今般我政府  
ニ於テ條約改正ヲ要求スルノ主意相當ノ歳入  
増加ヲ得ントスルノ目的ニアラスニテ保護政  
策ヲ行ハント欲スルニ在ルハ貴政府ノ深ク悲  
歎コラル、所タル旨ヲ閣下第一ニ申述ラル、  
カ故ニ去ル五月四日附拙翰並ニ之ニ相添ヘタ  
ル我政府ノ訓状中ニ於テ右御悲歎ヲ醸生スヘ  
キ文意有之カト調査スレ共更ニ其後無之保護

政策ノ事ニ涉ルハ只左ノ一項ノミ  
「爰ニ又一ノ著名ナル事情ハ平均僅ニ五分ニ滿  
タサルノ輕稅ヲ以テ各種ノ物貨皆外國ヨリ輸  
入シ来ルカ故ニ我國人新ニ工業ヲ興ント欲ス  
ルノ氣力大ニ之レカ為ニ妨ケラレ仍テ我政府  
ハ内國人ノ創業ニ一時保護ヲ與ヘ以テ地方ノ  
形勢ニ應シテ新工業ヲ起スヲ得セシメ相当  
ノ競争ヲ為スニ至ルマテ輸入品ニ賤賣セラル  
、ノ患ナカラシメンヲ政府ノ義務ト信スル  
ナリ」  
允ソ輸入稅適度ヲ得ルノ新業ヲ繁盛ナラシム  
ルニ裨益アルハ故人ジョンスチュアルトミル以下諸家  
ノ充分ニ確認スル所ナリ而シテ其事タル閣下

ト  
務

ノ非議セラル、所謂保護政策ニ渉ルヤ至テ僅  
少ノミ且ツ夫レ初答大ニ輸入税ヲ課シテ充分  
ニ保護ヲ加ヘサルノ国ニシテ工業繁昌スル者  
ハ未タ嘗テ之アラサルナリ日本豈ニ一二外商  
ノ利益ノ為メニ此主義ヲ舎テ、他ヲ試ミル  
ヲ願ハシヤ請フ又去五月四日附拙翰ニ述フル  
所ヲ見ヨ我歳計上及ヒ施政上ニ関スル其他ノ  
理由ヲモ之ヲ開示シ我政府輸入税ノ増額ヲ要  
用ト為ス所以ヲ説キタリト虽モ貴報遂ニ此事  
ニ及ハス尤モ經驗上宜キニ隨テ我税則改正ヲ  
請求スルノ權我國ニ之レアルハ疑ヲ容ル可キ  
ニ非スト虽モ不當ノ輸入税ヲ課シテ外国貿易  
ヲ妨止スルカ如キハ固ヨリ我政府ノ好ム所ニ

非ス是レ拙者ノ閣下ニ保證スル所ナリ当今我  
日本ノ海関税額ハ僅ニ歳入ノ四分ニ宛リ而シ  
テ貴国ハ其額ニ割六分ニ至ル此割合タルヤ歐  
米諸国普通ノ者ニ比スルモ亦遙ニ下流ニ居レ  
リ將來ニ在テハ我日本ハ外国トノ條約ニ依テ  
益々其政畧ヲ改メ現今他ノ数国或ハ貴国殖民  
地ニ実施スル所ノ者ヨリモ尚一層寛大ヲ示サ  
ント欲スルノ意タルハ拙者ノ確信スル所ナリ  
閣下ハ又我日本現時ノ歳入ヲ視レハ貿易不景  
氣ナルノ徴候ナシトシ之ヲ證セシカ為メニ一  
千八百七十七年ヨリ七十八年ニ至ルノ歳入其  
豫算ニ比スレハ凡ソ五百萬弗ノ超過ヲ致シ其  
内四十五萬弗ハ海関税ノ増額ナリトノ説ヲ引

用セラルル、ト虫氏拙者ニ於テハ尚我外国貿易  
 不景氣ナルノ論ヲ主張セラルヲ得ス歳入ノ豫  
 算ニ超過スルヲ以テ貿易不景氣ニ非ス又輸入  
 税ヲ増スヲ要セストハ拙者其ノ何故タルヲ解  
 スル能ハス日本ノ外他ノ諸国ニ於テハ年々ノ  
 歳入常ニ其豫算ニ超過シ海関税モ亦之レニ與  
 ラサルニ非ス雖然今豫算ハ暫ク擱キ觀近五ヶ  
 年間ノ我海関税歳入ノ実数左ノ如シ

- 一千八百七十三年 一、七三六、一〇八、圓
- 一千八百七十四年 一、六三一、四四九、圓
- 一千八百七十五年 一、七四四、八三七、圓
- 一千八百七十六年 一、七六二、五五四、圓
- 一千八百七十七年 一、七六七、一三九、圓

右負數ヲ以テ考レハ海関税ニ四拾五萬弗ヲ増  
 加シタリトハ其説ノ妄ナルヲ知ルベク又此負  
 數ヲ細別シテ輸出入ヲ別タハ愈々拙者ノ議論  
 ヲ證明スルニ足レリ實ニ價格數量トモニ非常  
 ノ増加ヲナシタル生糸ノ一品ヲ除ノ外ハ其他  
 ノ貿易皆悉ク大ニ衰頽ヲ致シ輸入貿易ニ於テ  
 ハ特ニ甚シクシテ貴政府ノ説ニ於ケルカ如ク  
 中々漸次昌盛ノ勢ニ非ス若又仮令然ラサルニ  
 セヨ我政府ニ於テハ尚ホ別ニ確實ナル理由ア  
 リテ輸入税ヲ増スヲ必用トスルナリ又閣下ハ  
 我政府輸出税ヲ廢スルノ議ヲ非トシ却テ日本  
 ニ大損害ヲ生シ貴国トノ貿易ニハ最テ著シキ  
 利益ナカル可シトセラル我政府ハ固ヨリ貴我

小  
 務  
 官

兩國ノ貿易ヲ以テ最モ緊要ト為スト。蓋シ他ノ諸國亦既ニ條約アリ其諸國トノ關係モ亦之ヲ計較セサル可カラズ。且歲計上實ニ止テ得サルノ事故アルニ非サル限ハ輸出税ヲ存スルハ萬國經濟ノ真理ニ悖ルカ如シ。一國若シ輸出ヲ競爭セント欲スルモ同種類ノ物產ヲ無税ニテ輸出スル所ノ國ニ當テ能ク其勝ヲ制スルヲ得可ラス。輸出多カラサル者ハ輸入亦乏キヲ能ハサルナリ。雖然閣下ノ此意見ニ就テハ我政府必スマ尚詳細勘考スル所アル可シ。備又我國ニ於テハ其税則ヲ以テ貿易ノ便利ヲ他國ニ与フルモ他國ヨリハ其報酬ヲ得ルヲナキノ説ハ拙者尚之ヲ主張セサルヲ得ス。又閣下ニ於テハ我國一

ニ物產ノ輸入ヲ某國ニテハ無税トナス。昔ヲ指シセラル、モ是レ當テニス可ラサルノ事ニシテ彼我同例ノ證ニ非ラス。今我日本ハ非常ノ低税ニ制限セラルレ。他國ハ我國ニ對シ輸入税ノ制限更ニアラサルナリ。又我國ヨリ茶及ヒ煙草ヲ當國ニ輸入スルノ少キハ其事情寧口拙者ノ論旨ヲ證スル所ノモノタルノミ。今貴國我日本茶ニ課スルノ税ハ大約原價ノ五割又煙草ニ課スルノ税ハ二十五割以上ニ至ル如斯ノ重税ニシテ何ソ日本ニ其出產ヲ盛ナラシメ又英國之レカ輸入ヲ多カラシムルヲ得シヤ。生糸ト米トハ當國ニ於テ實ニ無税ナルモ米ハ收穫過剩アルノ時ニ非レハ輸出セズ。我輸出物貨ハ無税

ト  
答

呂ヲ合セテ之ヲ通算スルニ貴国ノ税則ニ依リ  
我物産ニ課スルノ輸入税ハ平均一割以上ヨリ  
頗ル多シ我國取テ此点ニ於テ請求ヲ為シ進歩  
ニ悖ルノ政策ヲ施スノ意ナシト云ク我國ト税  
則條約ヲ立テ一モ我ニ讓与スル所ナキ国ニ對  
シ大ニ我ヨリ讓与スル所以ナキ理由ヲ辨スル  
ニ當リテハマタ是等ノ事實ニ觀察ヲ乞ハサル  
ヲ得ス又一千八百五十八年ノ條約我日本ノ国  
權ヲ犯ストハ貴政府ノ了解セラレサル所ニシ  
テ且又我國ニ於テ随意ニ自国ノ税則ヲ制定セ  
シテテ請求スルハ大ニ貿易ニ妨害ヲ来タシ通  
商各国ノ慣例ニ違フ者ナリトノ閣下ノ御論ニ  
於テハ拙者我政府ノ為ニ之ヲ辨セサルヲ得ス

抑モ我國ニ於テハ他ノ文明諸国ノ慣例ニ悖ル  
所ノ請求ヲ為スノ意毫モ之レアルヲナシ却テ  
將來日本ノ條約ヲシテ正義分明ノ者タラシメ  
ント欲スルナリ故ニ締盟諸国ノ此希望ニ應ス  
ルニ於テハ商業ヲ進ムル為メニ實ニ必要ノ説  
ハ何事ト云モ我政府必ス之ニ同意セサルヲ無  
ルヘキナリ然ルニ江戸條約ノ如キハ實ニ偏倚  
不正ノ者ニシテ一千八百五十八年ニ在テハ多  
少止ムヲ得サルノ情実アリテ然リシ者ナルハ  
キモ今ヤ既ニ其情実アルヲナシ而シテ從來我  
国嚴ニ該條約ヲ遵守スル者ハ各国ノ誠実好誼  
ナル必スヤ之ヲ改正スルノ時ニ方テハ其短所  
ヲ補正スルヲアラシテ信スレハナリ實ニ該條

ト  
務  
省

約ハ抑モ其起本既ニ汚辱ナル者ニシテ正當ナル條約ノ要領タル行為ノ自由ヲ缺キ締約ノ兩國共ニ其趣旨ヲ充分ニ解得セサル所ノ者タルハ即チ其書ヲ以テ之ヲ證スヘキノミ而メ該條約中使節等派遣ノ權ヲ附スルノ外一モ我國ノ為メニ設クルノ事項ナシ但シ使節派遣ノ權ノ如キハ假令之ヲ約セサルモ敢テ辭スルヲ能ハサル者ナリ其外兩國同例ノ件更ニ之レアルナシ此点ニ附キ拙者又茲ニ一證ヲ掲ケテ貴答ヲ乞ハン前ノ在日本貴国公使ノ文ニ云ヘルアリ曰ク日本トノ條約ハ總テ威カヲ以テ結ビタル者ナレハ宗教上威カヲ慎ムノ手段ヲ以テ之ヲ保持セント欲スルモ得ヘカラスト又一千

八百五十八年ニ米國總領事タリ後ニ同国公使タリシタウシセントハルリス氏ハ日本ト該國トノ條約ヲ議定シタル人ニシテ其餘約當ニ貴我兩國條約ノ基本タルノミナラス殆ント之ト異ナルヲナシ而シテ同氏ノ曾テ云ヘル言ニ曰ク江戸條約(一千八百五十八年)ニ附スル所ノ税則ハ全ク余カ手ニ成リ一ノ條款ト虫氏更ニ議論ナク又一モ日本委實ニ於テ改正ヲ加ヘタル者ナシ如斯未曾有ノ所為ニ至ル者ハ畢竟日本人ガ輸入税則ノ何モノタルヲ知ラス又関稅ヲ收入スルノ法ヲ知ラサルニ因ル者ニシテ正直ニ其事ニ暗キヲ打明ケ余ニ於テ敢テ不當ノ處置ナキヲ信シテ之ヲ余カ所為ニ任セタリ云々中畧又

外務省



余ハ常ニ日本委員ニ語テ曰ク此條約ヲ改正ス  
ルノ時至ルノ前ニハ日本人必ス實驗ヲ經テ自  
ラ能ク事ヲ辨スルヲ得ルニ至ルヘシト又之ニ  
説クニ十年ノ星霜ハ人間ノ一生ニ取テハ大要  
部ナリト云モ一國ノ命脉ニ於テハ敢テ又シキ  
ニ非ナル事ヲ以テセリ余ハ決シテ他國ノ内政  
ニ係ル事項ニ干渉スルノ權ヲ求メシフナシ之  
ニ干渉スルハ之ヲ征畧國ニ施ス可ク國際ノ權  
理上ニ於テ為スヘキ所ニ非スト由是觀之ハ一  
千八百五十八年ノ條約ハ果シテ我日本ノ國權  
ヲ犯スヤ否閣下ノ論旨ニ對シ辨論ヲ費ヤスモ  
無用ニ屬スルカ如シ依テ新條約ノ缺失ヲ何程  
迄ニ改良スルヲ得可キカタ思考スルノ寧口利

ナルニ如カス此儀拙案ヲ以テセシニ治外法權  
及ヒ之ニ伴フ外人内地居住ノ禁トヲ除キ其他  
ハ總ヘテ貴我兩國互ニ中外人民ノ權利特許及  
ヒ其義務ヲシテ皆之ヲ同一ニシ毫モ其間ニ差  
異無ラシムルノ約ヲ立ルヨリ善キハナカルヘ  
シ現行ノ條約ヲ改正シ若クハ新條約ヲ以テス  
ルトモ此約行ハルニ於テハ其細目ニ至テハ  
我政府更ニ異議スル所ナク且貿易ヲ便宜ナラ  
シムルノ事ハ必ス之ヲ承允スヘキヲ確信スル  
ナリ現ニ貴國ハ我日本ヨリモ緊要ノ事項ニ於  
テ遠ニ劣ル所アル諸國ト至当ナル互相ノ條約  
ヲ結スバルニ非スヤ何ソ日本ト互相ノ條約  
ヲ結ビ難シトセラレノ謂レアラシヤ今爰ニ

外務省

結尾ニ臨テ貴翰中論セラレタル就中我因條約  
改正ヲ要スルノ報知一件ニ付テ論セシ閣下ニ  
於テハ我政府ニテ尚今後改メテ一ヶ年前ノ報  
知ヲ為サ、ル可ラス而シテ其報知ニハ改正ヲ  
要スル條款ヲ詳記セサルヲ得スト論セラル是  
レ拙者ノ遺憾トシ且同意シ能ハサル所ナリ其  
理由左ノ如シ

第一 條約改正ヲ請求スルノ報知ハ即テ去ル  
五月四日附拙翰並ニ閣下へ進達シ置キタル我  
政府ノ訓状ニテ既ニ十分ナリト信ス且フ此件  
ニ付テハ閣下ト面晤ノ節ニモ我政府請求ノ主  
意十分ニ申述ヘ置キタリ

第二 我政府ハ五月四日ヨリ以前ニ前頭訓状

ノ寫ヲ東京駐劄貴国公使ニ送致シ且改正請求  
ノ主意判然通知ニ及ヒタル由ナリ

第三 我政府ノ希望ヲ陳述シテヨリ以来時日  
ヲ経ルヲ既ニ及シキニ其報告不充分ナリトノ  
通知ハ曾テ無之ヲ以テ該報告ニ御異論無之ト  
決スルモ不可ナシ故ニ速ニ各国トノ條約ヲ改  
正スルノ手續ニ及ヒタルニテ各国ニ於テハ右  
報告ノ書体ニ付テ當国ノ如キ異論アルヲナシ

第四 右報告中ニ改正ノ條款ヲ詳悉ス可シト  
ハ條約第二十二條ノ明文中其事アルヲ見ス經  
験ニ依リ宜シク改正スヘキノ件ヲ改正ス可キ  
ニテ我政府ハ只其件ヲ參議ニ期ニ至テ其改正  
ノ緊要ナル所以ヲ論スヘキノミ若シ我政府ニ

ト  
務  
省

於テ数多ノ締盟諸国ニ改正ノ條款ヲ詳悉ニ改  
正ノ十一月以前ニ之ヲ報告ス可トセハ我  
政府ノ不便實ニ言フ可アラサルナリ將又俄ニ  
税則ヲ変スルハ外国商人ノ利益ヲ妨害ス可  
シトノ論ニ於テハ新條約或ハ改正條約中ニ一  
款ヲ設ケ十分ニ猶豫ヲ與フル布達ヲナスノ後  
ニ非レハ之レヲ実施セサル可トセハ其害ヲ  
防クヲ得可シ閣下之ヲ發議アラハ我政府ハ敢  
テ是ノ如キ至當ノ議ニ異論ハ無ル可キナリ  
右ノ次第ニ付前顯報告ノ論ハ閣下漸然之ヲ廢  
絶セラレ條約改正ノ談判満足ニ整頓スルノ好  
手段ニ於テ貴政府ノ意見ヲ速ニ通知有之度切  
望ニ堪ヘス然ル片ハ我政府ハ勉メテ其旨意ニ

應シ他ノ各国トモ商議ニ及フベシ而シテ特ニ  
願フ所ハ總ヘテ是等ノ商議事情ニ於テ不都合  
ナキ限リハ貴国ト共ニカヲ合セテ事ヲ謀リ又  
我國ニ於テハ固ヨリ貴政府ノ意ヲ達スルニカ  
ヲ尽シ以テ我國ノ進歩ト貴国ノ地位トニ相背  
ムカス細大皆共ニ至當満足ナルノ條約ヲ結ビ  
テ兩國ノ交誼ヲシテ愈鞏固ナラシメンコト偏ニ  
所冀ニ候如此敬具

上野景範手記

甲 第

伴 國 政 府 ヨ リ ノ 返 翰

譯 文

去ル五月六日付貴翰ヲ以貴國政府ニ代リ千八百五十八年并千  
 八百六十六年ノ通商約定殊ニ貴我兩國ノ間ニ於テ交  
 易スル產物ノ関税法ニ係ル諸規則ヲ改正ニ取掛リ度  
 トノ義御申越之趣致承知候就テハ於本省早速右ノ調  
 査ニ取掛リ未タ相濟不申候得共今ヨリ貴政府ノ御目  
 的ヲ扶助セントシ誠願ヲ以兩國間通商ノ効ヲ成遂セ  
 シムヘキ様ノ場合ニ改正致度トノ意見ヲ閣下ヘ一應  
 申進置度存候  
 條約改正御請求ノ助論トシテ閣下ヨリ御申越ニハ海  
 関收稅額ヲ増加スルノ方法ヲ難被得ニ付貴政府ハ不

十 務 省

夕 夕 務 省

得止是迄既ニ内国人民ニ重課セラレシ直税ヲ増シ又  
佗ノ一方ニ於テハ相當ノ輸入税ヲ課シテ以テ内国ノ  
産業ヲ擴張スルヲ能ハス且輸入物ノ額ハ輸出物ヨリ  
超過スルヲ以テ常ニ正金銀ヲ輸出シテ其差ヲ平均ス  
ルニ至リ斯ク日ニ衰弊ヲ加ヘ候景況ヲ改復センカ爲  
メ貴国商品ノ輸出税ヲ廢止セララルヘキ御見込之旨御  
申越ニ候處若シ外国ニ於テ貴国ノ産物ニ課スル處ノ  
輸入税ヲ減スルトテ承諾不致時ハ右ノ御方略モ果シ  
テ目的通り充分ニ相達シ候義ハ如何可有之哉ト存候  
乍併右御申越之趣ハ拙者ニ於テ御尤ノ次第ト相考候  
間幾分カ御同意致シ度存候得共貴国ニテ我商品ノ輸  
入ヲ妨ケ候程關稅ヲ増加セラレ或ハ我商品ニ對シ諸  
外国ヨリ輸入ノ同品ニ異ナル重稅ヲ課セラレ候様之

義ハ承諾難致候

將又我政府ニテ御請求ニ應シ候處ニ對シ貴政府ヨリ  
モ兩國互相之通商ヲ盛大ニスヘキ様之御處分可有之  
ハ至當ノ義ト存候尤右之御處分ハ關稅ヲ減セサルノ  
ニナラス却テ貴政府カ稅權回復ノ御望ニ叶ヒ收稅ノ  
額ヲ増加スヘキ者ニシテ即開化諸国ノ間ニ組成セル  
真誠堅固ナル通商事業ノ利益ヲ貴我兩國ニ於テ享有  
セントスルノ方法ニ有之候而メ其事クルヤ貴国内地  
ニ於テ可成外国人ノ居住旅行ヲ容易ニシ内国ノ農業礦業  
其他諸産業等ニ關係スルトテ許可シテ之ニ從事スル  
トテ得セシメラレ且歐洲諸国ノ貿易上ノ條理ト意想  
トテ内国人民ニ開示セララル義ニ有之候  
如斯ク全ク寛裕ノ趣意ニ相成候得ハ第一貴国政府ハ

其人民ノ利益ヲ補助シ且閣下ヨリ御申述ノ會計上困難ナル場合ヲモ安全ニ改復シ得ヘキ義ト存候  
該件ニ付本省見込ノ次第ハ尚遑テ可及御商議候得共  
前文ノ義ハ貴政府ノ御意見ニ相叶可申哉否致承知度  
候尚又東京朝廷ニ於テハ我國ニテ貴産物ノ輸入税ヲ  
如何様ニ輕減シ又貴國ニテ我商品ノ輸入税ヲ如何様  
ニ增加被成度トノ御見込ニ候哉尚其望ヲモ致承知度  
不堪懇請候敬具

千八百七十八年八月三十日於巴里

ワシントン

鮫島公使閣下

乙號

佛國外務卿ト最後談判ノ節同卿陳述ノ主旨撮記

貴我兩國ノ條約重修殊ニ貴國海關稅權回復ノ義ニ  
付先般御書翰御差出相成候後篤ト熟議及候上我政  
府ノ意見以書翰御返答致置候事ニ御座候取貴國ニ  
テハ海關稅則并貿易章程等ヲ貴政府ニテ適宜ニ御  
定被成候事不相成且今日施行之稅則ハ貴國ノ為メ  
不都合之虞不少ニ付此度右稅則ヲ改定スル之權理  
ヲ御回復被成度トノ御見込之段致承知候成程獨立  
國ナレハ何レモ勝手ニ其國海關ノ稅額ヲ制定スル  
之權利ハ固有致居候筈ニハ候得共御存ノ通り即今

外務省

ハ世界ノ貿易段々盛昌ニ到リ候様ノ方法ヲ謀リ候  
進路ニ入り候時節ニ有之候然ルニ諸國ニテ各自隨  
意ニ其海關へ輸入スル外國商品ニ課スル税法ヲ定  
メ候時ハ自ラ保護ノ趣意ニ陥リ貿易次第ニ却歩之  
勢ニ相成過モ盛大ニ赴クヘキ道無之候故近來ハ歐  
洲諸國ニテ貿易條約ノ說大ニ擴張シ各國共互ニ貿  
易條約ヲ結ビ候様相成即於我國モ米國ヲ除クノ外  
歐洲諸國トハ大抵不殘貿易條約ヲ結ビ其國々へ對  
シテハ條約ノ年限中ハ彼我ノ間ニテ決定ノ稅則ヲ  
守リ居我邦ニテ自由ニ昂低スルヲ能ハサル様ノ次  
第ニ御座候間此度貴國ニテ定稅之權ヲ御回復被成  
度トノ御望通り御同意ハ御氣之毒ナカラ致兼候  
乍併過日御差出之貴翰ノ意味并拜晤ノ節ニ御陳述

之事情等ヲ篤ト相考候処今日貴國ヨリノ御請求ハ  
如何ニモ御尤之事ト存候間我政府ニテハ可成丈ケ  
御請求ニ應シ貴國ノ為メ都合好キ様御相談ニ及ヒ  
度積ニ御座候  
就テハ貴國之御望モ幾分欵相達シ且貴我兩國之貿  
易ヲ盛昌ニ進メ候様相導キ候ニハ兩國間ニテ貿易  
條約ヲ結ビ候ヨリ外無之ト存候貴政府ニテ御同意  
相成候ハ、貴國へ輸入ノ我商品ニ課スヘキ稅則并  
我國へ輸入ノ貴國商品ニ課スヘキ稅則等ノ義ニ付  
テハ何レ貴國ヨリノ御望モ可有之候間可成丈ケ貴  
國ノ御望ニ應シ兩國ニテ互相之利益ヲ得候様之方  
法ニ相定メ度存候  
貴政府ニテ右ノ貿易條約ヲ取結フヘシト御決定相

成候ハ、我國ニテハ何時ニテモ差支無之候間閣下  
貴政府ヨリノ訓令ヲ御受被成次第早速取掛リ可申  
候  
此度ノ條約改正ハ先ツ於東京取計ニ度トノ御内考  
之趣閣下ヨリ御咄有之候得共我國ニテハ從來右様  
之條約ハ多ク巴里府ニテ取調ヘ来リ掛リノ官負ニ  
モ其事ニ手慣居候間可成ハ當府ニテ閣下ト御商議  
ノ上決定候様致シ度候乍併外各國ニテノ振合モ可  
有之ニ付何レ追テ御相談ニ及ヒ如何様ニモ双方ノ  
都合好キ様可取計候云々

條約改正一件報告第一号

海関稅重箱一件ニ付二月九日附別信茅壹号ヲ  
以テ訓状在ニ御内考其他一切之書類亦送致相  
成拙者微力之及フ文々ヲ尽スハ素ヨリ之職責  
ニシテ且兼テ冀願スル所ナレハ篤ト高考訓状  
中之意味ヲ大イタシ候処獨立之國權ニヨツ  
テ製稅之權ヲ我ニ回復スルハ固ヨリニ候ハ共國  
費之不足ヲ補ハシカ為ニ輸入稅ヲ增加シ内國  
之産業ヲ獎勵センカ為ニ輸出稅ヲ廢シ前後之  
文体稍保護稅法ヲ設用セント欲スル趣意ニ相  
當リ猶和友之者ヘモ内談イタシ候ニ當國之如  
キ自由貿易ヲ主張スル人民之耳ニハ如何ニモ



穩當ヲ得ガル様相聞ヘ加之訓状之如キハ他日  
世論之因據トナルヘキモノナレハ宜シク天下  
之輿論ニ基キ其公理之歸スル所ヲ可成短正ニ  
論下シ一讀以テ正理ニ感覺スル様相認候候  
ニ緊要ニ有之然シテ其細目ニ至リ情實之尽サ  
ル所ヲ弁明シ或ハ自家之内情ヲ訶ル如キハ  
駐劄公使應接之于段中ニ相任且新卷ヲ開キ輸  
出税ヲ廢スル等之ケ條ハ彼ノ便益ト認ム可キ  
モノナレハ彼若我之請求ニ應セハ酬ユルニ此  
便益ヲ以テスル等可機ニ應シ總テ駐劄公使談  
判上之論持トシテ相貯置候方便利ニ有之論談  
ノ初ヨリ我之可附與便益ヲ彼ニ知ラシムルハ  
恰モ兩軍相對惟幕之事ヲ敵ニ通知スルト一般決

シテ策ノ得タルモノニ非ラス尤訓状中國費之  
多端ヲ訶エル如キハ所謂泣告ノ言辞ニ屬ス願  
ル交際上之文牒ヲ失候様被考候ニ付斯ノ如キ  
語彙ヲ省キ百端内國之情實ヲ哀訴スル者駐劄  
公使之口上ヲ以テ説明イタシ候ヘ者体裁モ極  
メテ宜シカラント存候ニ付曩ニ巴理府へ出張  
鯨島公使トモ打合同氏ヨリ電報ヲ以テ訓状中  
之文義更正之相伺候処右訓状寫ハ己ニ在日本  
各國公使等へ封配達相成候後ニテ時機ニ相後  
レ今更御開届難相成趣實以遺憾ニハ存候ヘ共  
最早無撥候ニ付本文之終ニテ取扱候事ニ相決  
然シテ當國外務卿へ可差出公翰之文紫并ニ着  
手之順序等馬事打合相濟候間直ニ歸英五月十

日外務卿コルド、サリスビユリー、一、面會一先閣  
下御下附之訓状寫ヲ出シテ展讀ニ附シ然シテ  
日英間條約ハ千八百七十二年ニ於テ改正之期  
ナリシニ我國內政上理務之都合アリテ今日迄  
遷スルニ至レリ今ヤ其改正之用意整頓セルヲ  
以テ現在條約中ニ掲載之推理ニ基キ公然條約  
改正之儀ヲ英政府ニ通知シ然シテ其改正ノ方  
今我國ニ最緊要ナル事情ヲ詳ニ弁明スベキ旨  
批者ニ命令ヲ下セリ其事情之大意ハ書翰ニ認  
メ爰ニ持參シタレトモ猶書中意ノ尽サ、ル所  
或ハ御疑問之齋アラハ口上ニテ弁解センカ為  
ニ今日面晤ヲ乞ヒシ趣ヲ速ニ別紙（イ印）之書  
翰ヲ外務卿ニ予渡セシニ卿稍久シク是ヲ査閲

シテ曰ク今回條約ヲ改正スルニ重ニ日本政府  
之緊要ナリトスル所ハ輸入税ヲ増加シテ理賦  
之便ヲ得併セテ外國品之輸入ヲ制限セントス  
ルモノ、如シ然ラハ現ニ保護税法ヲ設用スル  
モノニシテ抑保護税法之商法上ニ害アルヤ古  
來此國ニ於テ実験セシ所ナレハ是ヲ以テ國家  
理賦之便ヲ得ントスルハ主義大ニ其目的ニ及  
シ日本之為ニ甚痛ム可キト云ハサルヲ得ス  
且日英間商法之実況ハ當國ヨリ輸出スル物品  
夥多ニシテ日本ニ保護法之行ハル、ハ直ニ當國  
商民之為ニ接之響影ヲ來タシ其損害甚大ナ  
リトス亦訓状中ニ輸出税ヲ廢スルノ一アレハ  
當國ハ日本ヨリ輸入スル物品少ナキヲ以テ夫

カ為ニ得ル所勘ナシ固ヨリ英政府ハ日本之為  
ニ萬事之進歩ヲ計ルハ好ム所ナリト雖モ此度  
之問題之如キハ當國之為ニ損益相償ハサルノ  
ミナラス一般自由貿易之國是ニ及シ實ニ一難  
問タル 甄ヲ速ベ頻リニ保護自由兩法之得失如  
何ヲ説諭セラレタリ拙者右ニ答ルニ元來我政府  
ノ要求スル眼目ハ固有之國權ヲ回復スルノ一  
點ニ止リ外交ノ初日本ニ於テ各國交通之規法  
ヲ不弁時仮リニ外國之為ニ抑制セラレタル制  
稅之權ヲ我ニ維持セントスルナリ是一般各國  
之專有スル國權ニシテ已ニ我國之外交ヲ初シ  
以來數十年政府ハ專ラカテ内國開通之路ニ尽  
シ方今大ニ其面目ヲ改メタルハ兼テ卿等之我

ニ賞讀シ賜ヘル如クナレハ今度條約改正之機  
ニ臨ミ此製稅之權ヲ我ニ回復セント望ムハ國  
權上ヨリ云ハ勿論情實上ヨリ論シテモ決シテ  
過當ニ非ラサルヲ明ナリ石製稅ノ權我手ニ歸  
シタル以上ハ保護自由之兩法其適宜ナルモノ  
ヲ選定スルハ固ヨリ我政府之權内ニ屬スルヲ  
以テ政府ハ實地高況之如何ヲ量酌シテ決シテ  
日英間通商上ニ障礙ヲ來タス如キ不相当之所  
分ナキハ疑ヲ容レズ卿ノ言ノ如ク英國ハ日本  
ハ輸出スル物品多キヲ以テ其地ニ保護法ノ行  
ハルハ英國ノ不利ナリトセハ我國ヨリ云ヘ  
ハ日本ハ英國ヨリ輸入品多キヲ保護法ヲ行ハ  
ナレバ不利ナリトシ斯ノ如ク自國之利ノミヲ

互ニ計リテ天下之公道ヲ不顧時ハ終ニ弱國ハ  
強國ト交通シ能ハサル之場合ニ至ラン亦保護  
自由之兩法ハイヅレモ其國ノ時勢ト商法之異  
況ニ後ツテ得失ヲ異ニスルカ故ニ現ニ今猶歐  
米其他英國之領地中ニモ未タ全ク保護法ヲ棄  
却セス只英ノ本國ノミ自由貿易之適當ナルモ  
往日保護法ヲ設用シテ内國之産業ヲ勸奨シ其  
結果ニヨツテ各製造所之盛大ヲ至ヒシ後ノ丁  
ナレハ是ヲ以テ何ノ國ニモ適當スルモノト云  
難シ則我國之如ク近年俄ニ人民ノ体面ヲ一變  
シ諸事日々歐洲文明之風習ヲ慕ヒ平常日用瑣  
末之物品ニ至ル迄多ク外國之輸入ヲ仰ク之時  
ニ當ツテハ或品ハ自由貿易之主義ニ從ヒ或品

ニ對シテハ保護税法ヲ用ヒサル可カラサルモ  
ノアリ故ニ一稅ニ自由貿易ノミヲ適當ナリト  
シ能ハサル趣ヲ論シ其他亦外交上ニ關シ國費  
ノ多端ヲ不厭シテ政府之意ヲ用ヒタル所以等  
拙者ノ及フ大ケハ并解イタシ候然ルニ卿亦云  
ノ當國ニ於テ曾テ日本ト條約ヲ取結タル時分  
之茶之輸入稅ハ方今其半ヲ減シタリ是則日本  
之為ニ通商之繁盛ヲ計リシ一證ナリト  
（英政府  
如ハ此日本之產物ニ對シ輸入稅ヲ增加セシ  
府ハ英國之產物ニ對シ輸入稅ヲ增加セシ  
トスル語筆ナリハシ）拙者ハ是ニ答ルニ茶ハ曾  
テ人生ニ必用之品ト認メラレス所謂奢侈品目  
中ニ屬スルモノトナシ酒烟草等ト一般歐洲各  
國何レモ高稅ヲ課セリ衛シ近年ニ至ツテ加非

等ト等ヲ同フシテ是ヲ用ユル者益多ク稍ヨ用  
不可欠之品ト目セラシムルニ至レリ然リト至モ  
方今當國ニ於テ其輸入税ハ茶ノ量壹パウシド  
ニ付六ペンスヲ課ス其市價九壹シルリングナ  
ルヲ以テ現ニ五割之高税ヲ拂ニ当ル我國方今  
之輸入税額ハ二十年前重ニ從量税法ニ基五分  
ヲ本トシテ定メタルモノナレハ近來物價ノ騰  
貴ニ後ヒ其平均四分ニ至ラザルヲアリ今  
四條約改定之機ニ至リ我政府ニテ輸入税ヲ增  
加セントスルニ英國ノ茶ニ於ル如キ過税ハ課  
セサルヲ信ス卿微笑シテ曰實ニ然リ乍併日本  
ニ於テ輸入税ヲ増加スルハ現ニ當國之商民ニ  
多少之損害ヲ蒙ルヲナレバ篤ト通商局等之報

告ヲ得内閣之衆議ヲ奉シ候上ナラテハ返答致  
シ難ク就テハ日本政府ニテ凡何程迄ニ輸入税  
ヲ増加可相成欲粗其大体ヲ知ルヲ得者内閣ニ  
於テ評議之一助ト可相成尤此後ハ一二回之談  
判ニテ決司ニイタル可キ事柄ニ無之且訓状之  
趣意大ニ當國之國長ニ及悖スルヲ以テ猶幾度  
モ談合可致只其請求之情實ニ於テハ尤ナル次  
第ニ付可成速ニ相運候様注意ス可シトノ事ニ  
有之然ルニ幸改正税目草案ヲ所待スレハ内見  
ニ可入旨ヲ約シ其他各様ノ談話九五十分時間  
之應接ニシテ辞モ直ニ別紙(口印)内書ニ改正税  
目草案ヲ附シテ外務卿ニ至セリ此日之應接者  
初テ之開談ニシテ裕別深奥之點迄ニ達セサシ

ト、臣モ外務卿ノ詔筆ヲ以テ考察スルニ我國ニ  
製稅之權ヲ相任候テハ、忽チ保護之過稅ヲ課シ  
通商之妨碍ヲ引起ス可キヲ以テ、兩國協議シテ  
方今之輸入稅ヲ至當ニ増加シ、是ヲ以テ將來之  
約束トナシ以テ、通商ヲ保護セントスルノ意ニ  
相見得其外之ヲ條ニ於テハ、別ニ異議ナキ様被  
察先十中之七八分ハ、被得可申ト存候  
元來當國理財家之保護法ヲ嫌忌スル實ニ甚敷  
近ク其一ニ例ヲ挙レハ、拙者事ニ因テ此事ヲ一  
ニ友ニ語ル一人曰ク、保護法ヲ英政府ニ迫ルハ  
「及ヲ抽テ人面ニ擬スルカ如シト他ノ一人曰ク  
此法ヲ日本ニ行ハントスルハ、及ヲ以テ自家之  
首ヲ刎ルニ異ラス」ト二人ノ云フ所恰モ符節ヲ

合スルカ如シ殊ニ當國ハ多年之經驗ニヨツテ  
自由貿易之國是ニ一定セルヲ以テ、斯ノ如キ政  
府ニ對シテ保護法之物産ヲ作興ス可キ之說ヲ  
喋ラスルハ拙者不肖ニシテ、寔ニ論談シ不容易  
深御勘考可被下候亦是ニ如ルニ當國ニハ諸職  
人之紛擾起リテ一時ニ英國一般ニ蔓延シ人家  
ヲ燒キ製造所ヲ破壊シ入テ、暴殺其騷動實ニ一  
方ナラス夫カ為メニ諸製造所ハ永ク休業セリ  
抑其原因ヲ尋ルニ職人等協議シテ、賃錢之増ヲ  
乞ヒシニ、近來米國ヨリ本綿白耳義ヨリ鉄類多  
分ニ當國ニ輸入シ價モ當國ニテ製スルモノニ比  
スレハ廉ニシテ、遂ニ英國製造所ハ是ニ拮据ス  
ル能ハサルヲ以テ職人等之望ニ應スルヲ能ハ

ナリシ依ッ職入等ハ愈黨類ヲ煽動シ四方ニ激  
文ヲ飛シ各地一時ニ起ツテ此騒乱ヲ醸シ方今  
稍鎮定ノ模様ニ候ヘ共諸製造家ハ屢々各地ニ  
集會シテ英政府ノ他各国ニ對スル通商条約ノ不  
當ヲ馬撃シ遂ニ外務卿自ラ其場ニ臨ンテ説明  
ヲ加エル至レリ是等モ自然ニ内閣中ニ顧慮ノ  
念ヲ起シ幾分欲我条約改定ニ妨碍スルノ響影  
ナシト云難シ

曾テ外務卿ハ伯林府ノ大會議ニ出張相成是ハ  
我条約定ノ决答遷延ノ原因ニシテ固ヨリ省務  
ハサーヂユリエンボンスート氏ニ相任有之候  
間屢々面會可成我ノ概意徹底候様談話イタシ  
置候處月余ニシテ伯林府ノ會議ニ苟ヲ結外務

卿モ帛英相成候ニ付折々面會イタシ候ヘ共イ  
ツモ繁忙ノ際ニテ充分ノ談判出来不申然ルニ  
一夕同卿ノ夜會アリテ拙者ニ出張イタシ幸  
ノ機會ト存候ニ付聊条約改正ノ返書ヲ相促候  
處伯林府會議ノ為ニ諸事ヲ捨置出張イタシ候  
ニ付彼是遲延セリトノ一ニテ夫ヨリ種々ノ世  
談ニ相涉リ候處傍ラニサー、ロザホルト、アルコッ  
ク氏アリテ外務卿ニ對シ頃リニ語ヲ接セシト  
欲スルノ趣アリ卿ハアルコッ氏ヲ顧テ貴下曾  
テ長ク日本ニ在留シ其国情モ委敷兼知アルヘ  
キナリ方今日本政府ヨリ条約改正ノ儀ヲ通  
知相成居リ就テハ質問イタシ度ナ有之間外務  
省ニ出頭アラントテ乞トノ一ニ拙者ハ其翌日

アルコック氏ヲ訪ヒ我ノ要求スル旨趣ト情実  
トヲ詳ニ説明シタリ兩日ヲ経テアルコック氏  
ヨリ書來ル其趣意ヲ概言スルニ同氏外務卿ニ  
面晤アリシニ保護法ノ一弊甚難問ニシテ到底  
輸入税ヲ増加スルハ日英通商上ノ障碍ニナラ  
サル様取極度トノ趣ナリシ由亦当月十日拙者  
外務卿ニ面會寛々之談話ヲ得申候其大畧ハ拙  
者奏言スルニ數月前書ヲ卿ニ致マシ以未我政  
府ハ其事之緊要ナルト時日之切迫スルヲ以テ  
英政府之決答如何ヲ屢々問合未リ候間願クハ  
何分之返答アラシトヲ乞旨ヲ申述シニ卿云ク  
此事タル實ニ尋常一般之事柄ト違ヒ答方之致  
告ヲ得内閣之熟議ヲ尽シ候上ニテ取極ムル

ナレハ容易之事ニアラヌ加ルニ柏林府之會談  
ニ出張不致候而不叶トニ相成東方論之如キハ  
英國直接之利害ニ関シ美ニ一大重事件ナレハ  
他ノ緊要ナル事件モ打捨置出発イタシ候次第  
ニテ帰英之後ト虽モ事務イマク全ク決局ニ至  
ラスシテ寸暇ヲ不得引續アフガニスタシ之事  
件相発シ内閣頗ル繁忙ヲ極メ夫カ為メ今日  
迄遲延シタリ故ニ拙者亦云此事ヲ同時ニ申以  
メル他ノ政府ハ折々返翰落手イタシ中ニハ  
其細条ニ至ツテ充分ニ我政府ノ意見ト符合セ  
ルモノアレトモ要領之大趣意ニ於テハイツレ  
モ拾別ノ異議無之様相見得殊ニ米魯之兩政府  
ハ一層満足ノ答書ヲ致サレ折々實地更正ニ着

大  
議  
省



手ノ時日相迫リ候間本意ナラスモ斯ク抑催促  
ニ及フナリト我ノ其夫答ヲ要スルト切ナル  
ヲ反覆論辨セシニ卿エク然ラハ内閣ニテ租  
裁セシ大畧ヲ説明セシ抑英國ハ日本ト通商上  
關係ヲ有スルト他ノ國ニ比スレハ甚大ナレハ  
其國用進之路ニカク尽スハ實ニ好マシキナ  
レモ今愛日本政府ノ要求ハ過日ヨリ度々陳述  
セシ如ク當國自由貿易之國是ニ及シ殊ニ内借  
イタシ候改正税目草案<sup>中</sup>ニハ當國ノ重ナル産物  
木綿類ニ最著ルシキ増税相見エ此終ニテハ日  
本政府ノ意通りニ兼服イタシ候事難相成乍併  
日本政府ニテ條約ヲ改正スルハ至極適當ナル  
トト考ルニ付實地改定ノ時ニ臨ミ適當ヲ制限

セザル文々ノ事ハ何様トモイタシ候方可有之  
トノ趣ニ有之依ツテ拙者ハ亦然ラハ條約改定  
ハ御異存無之然シテ實地改定ノ時ニ臨ミ通商  
ヲ制限ス可シト思考スル過税ヲ課スルニ非レ  
ハ我政府要求ノ趣旨ニ基キ何程欣ノ増税御同  
意ナリト了解イタシ可然欣ト押返シ相尋候処  
右ハ只内閣ノ内決ヲ談話セシノミニシテ他ナ  
ル事ハ書翰ニ認メ送致可致トノ事ニ有之其他  
貿易規則港則沿海回航ノ権等談話ニ及候爰石  
等ノ瑣事ハ格別ノ異議無之様相見エ亦卿ノ說  
ニ英國政府ト雖モ他ノ國ト通商條約アルヲ以  
テ勝手ニ税目ヲ更正スルト能ハス日本政府モ  
他ノ政府ト税目ヲ極メ是ヲ約束トナスト差支

大藏省

ナカル可シト拙者ハ曼ニ答ルニ我レ政府ノ命  
ヲ得スト虽モ談爰ニ及フヲ以テ自己ノ意見ヲ  
陳述ス我政府モ製税ノ權ヲ我手ニ掌握シテ通  
商ヲ妨ケレトスルニ非ス巨額ノ歳入ヲ要スル  
ニ非ラヌ必竟其望ム所ノ原因ハ重ニ國權ノ一  
點ニ關スル譯ナレハ製税ノ權ヲ我ニ得候上  
ハ互相ノ理ニ基キ適當ノ通商條約ヲ結フハ妨  
ケナカルベシ石ノ通今日ノ談判殊ノ外都合互  
敷候間此次便ニハ隨ナル好報差上候儀ニ可相  
成候此段報告如斯却坐候以上

明治十一年十月十八日 全權公使土野景範

外務卿寺島宗則殿

追テ本文(イ印)ノ書翰ニ對シ返リニ外務卿  
ヨリ差裁相成候返翰別紙写(ハ印)差進候

大藏省

上野ヨリサリスブリ候ヘノ贈翰

貴我兩國間條約改訂之儀ニ付今般我政府ヨリ  
拙者ヘ送越セシ訓状ノ訳文ヲ今美ニ閣下ニ進  
達スルニ當リ我政府右改訂ヲ要スル諸般ノ情  
實並ニ其之ヲ請求スルノ条理ヲ聊カ尤ニ聞申  
ニ及ヒ候

拙者ヘ宛タル右訓状中記載ノ通り我政府此改  
約ニ於テ期望スル所ハ我帝国固有ノ主權就中  
貿易章程及輸出入税目ヲ整理スルノ權理ヲ擴張  
セント欲スルニ在リ抑モ獨立國ノ權理タルヤ

外国貿易ヲ制定スル如キハ最モ其不可争ノ推  
理タリ然ルニ從來日本ニ在テハ條約ノ為メニ  
姑ク此権理行レサリシモ是只一時ノ間絶タル  
ノ三仍テ我政府ハ今ヤ当ニ條約ヲ改訂シテ二  
十年前事情不通ノ故ニ失フ所ナル此権理ヲ恢  
復シ施为ノ自由ヲ要求スヘキノ時ナリトス現  
ニ此改約ノ権ハ條約面ニ即チ其明文アリ假令  
其明文之レナキモ元來貿易條約ノ如キハ決シ  
テ永久不易ノモノニ非ス事勢ノ變遷ニ随テ宜  
ク之ヲ改正スヘキハ既ニ一般ニ公認セラレ、  
所タリ即チ我國迄來大ニ其政畧目途ヲ變更シ  
其狀態ノ昔日ト相同シカラサル實ニ此改訂ヲ  
要スルニ足レリ加之現今我國新タニ間稅ヲ設

ケテ歲入ノ額ヲ増シ以テ一ニハ國費ノ需用ニ  
充テ又一ニハ直稅既ニ重キニ由リ間稅ヲ以テ  
之ニ代フルノ極メテ必要タルニ至ル且又平均  
五分以下ノ課稅ヲ以テ百般ノ貨物皆外國ヨリ  
輸入シ來ルカ故ニ我國新タニ工業ヲ興起セ  
ント欲スルモ之レカ為ニ其志ヲ起スヲ得ス是  
ニ於テ我政府ハ外國ニ對シ相當ニ競争スルノ  
勢ニ至ル迄ハ先ツ姑ク内國ノ工業ヲ保護シ低  
價ヲ以テ輸入品ニ壓セラル、ノ患ナキ様地方  
ノ事情ニ應シテ物産ノ製造ニ着手セシムルヲ  
政府ノ職分タルヘシト思考ス且又僅ニ名義ノ  
三ニ過キサルノ課稅ヲ以テ外國製産品ノ我國  
ニ輸入スル限リハ同様ナル我國製産品ニ

相當ノ税額ヲ課スルノ難クシテ緊要且正当ナル間税ヲ收入スルヲ得可ラス實ニ我國ノ理財施政及工業ニ関シ不得止ノ情實現ニ如斯キニ付我政府ハ適宜ニ我自國ノ税則ヲ設定スルノ自由ヲ復スルヲ至當トシ且必要トナスナリ此外ノ条件ニ至テハ保護ノ日ニ及ニテ尙論スヘシト虽氏今日ニ於テ最モ其至要トスルハ税推ノ一事ニ在リ我政府今般ノ条約改正ヲ主張スルノ旨主即チ大要如斯シトス元來我國ハ五分ヨリ多カラサルノ税額ヲ以テ外國品ノ輸入ヲ許容スルノ義務ヲ負フト虽氏我國ニ對シテハ同例ヲ施スノ國ナリ我國ノ物産ハ各國ノ諸港ニ於テ皆其品類ニ應シテ充分ノ税額ヲ課セ

テレ我國ノ重ナル輸出品タル茶煙草ノ如キハ其税ヲ課セラルヤ到ル処殆ント皆格外ノ重税ト云フヘシ  
我國ノ貿易ハ我本國ニ於テ興フル所ノ便益ニ向テ其報償ヲ他國ヨリ受ルヲ得然レ氏我國ヨリ他國ニ此等ノ便益ヲ与ルモ猶ホ從來ノ税則ノ如キニテハ輸入貿易ノ為メニ不都合ナシトセス是レ則チ此税則ヲ改正スルニ於テハ我國ノ外國貿易ニ如何ノ実効アルヘキ乎ノ説ヲ閣下ノ考案ニ供スル所以ナリ尤モ我政府ニ於テハ今般ノ税則改正ニ付テ外國ノ利益ヲ損スルヲアラントハ思慮セズ外國貿易ハ却テ之カ為ニ到底著シキ利益アルヘキヲ信スルナリ

其理由尤ノ如シ  
日本ハ外国品ノ輸入ハ殆ト無税モ同様ノ輕税  
ナリト虽氏數年來其更ニ振ハスレテ衰微ノ甚  
シキハ日本トノ貿易ハ全ク利益ナキニ至リタ  
リトノ概歎ヲ對国人中ニ發スルニ至ル此不景  
氣ノ原因ハ暫ク之ヲ擱キ日本ヨリ輸出ノ物價  
ハ之ヲ輸入ノ物價ニ比スレハ常ニ大約二ト三  
トノ割合ニシテ此差違ヲ償ハカメニハ金銀  
貨幣ヲ輸出セザルヲ得ス外國貿易ノ情況如斯  
ニシテ尚止マスシバ數年ノ后ハ日本ノ貿易ニ  
甚シキ禍害ヲ生スルキハ必然タルノミ是レ閣  
下モ亦了解セラル、所タルヘシ又輸出貿易ニ  
於テハ輸出税ノ為ニ妨ケラレ盛大ナル能ハス

然レ氏此税ヲ廢スルニ至ラハ大ニ之ヲ振起ス  
ルヲ得ヘク而メ日本產物ノ海外ニ其賣高ヲ増  
加スルハ外國品ヲ買入ル可キ國カラ擴充シ  
随テ輸入ノ需要モ振起スヘキハ決シテ疑ヲ容  
レサル所ナリ是故ニ我政府ハ請求ノ通り改正  
条約成ルニ於テハ輸出税ヲ廢棄セントス仍テ  
此運ビニ至ラハ日本ノ物價廉値ト成リ随テ外  
國貿易上ノ利益タルヘシ若又万一ニ前頭貿易  
改良ノ見込ヲ相違トシ又或ハ貿易ノ不景氣依  
然トシテ永續スヘシトシ又或ハ輸出入税共ニ  
同時ニ改正セサルヘシトノ確説アレバ我  
政府ニ於テハ如斯キノ想像論ヲ以テ我政府現  
今ノ見込ヲ破ルヲ得ヘキモハ認ムル能ハサ

ルナリ元来此条約ノ事ハ嘗ニ我国トノ貿易ノ  
ニ係ルモノニ非ス我国ト海外万国トノ関係  
ハ永ク只貿易ノ一頁ノニ止ル可キニアラサ  
ルハ閣下モ之ヲ認許セラルヘキハ疑ナキ所ニシ  
テ目下我国ハ類リニ文化教育ニ進歩スルノ国  
ナレハ實ニ其國推及ヒ國益ハ特別ノ認許ヲ得  
ルニ足レリ依テ閣下ニ於テハ我国ノ情實及其  
利益トヲ以テ此論件々大原因ト認メラレシコ  
トヲ希望ス猶又此条約改正ノ儀ニ付貴政府ノ  
御目途ヲ通知セラレ度且我国ノ論業貴國ノ嘉  
納スル所ト为リ速ニ改正条約實行相成貴我兩  
國ノ實益ヲ發生候様致度拙者希望スル所ニ候  
右得貴意度如斯敬具

上野景範

機密信第三號

條約重訂之義。有先般未追々着手仕候次第機  
密信并別信ヲ以申上置候後無程東方事件ニ付  
伯林府之會議ニテ各國政府共多用ニ有之引續  
キ暑中休暇ノ時ニ到リ政府官員等大抵他行不  
在ニテ本件之取調筋モ不拂取候處其後佛蘭西  
、白耳義兩政府ヨリ之返書落手仕候得共右ハ  
我ヨリ差出候書翰ニ對シ的然タル返答ニ無之  
候故外務卿歸府之上尚辨論及ヒ且彼方之内情  
等篤ト蒙リ取纏ノ可申上考意ニテ右之返翰モ  
今回迄不差進事ニ御坐候  
一本件ニ付我ヨリ書翰差出候後當外務卿ハハ  
屢面會シ我政府請求之條理并情實等具ニ申



述外務卿ニハ委細了解致候間尚篤ト熟議可  
致ト返答有之候後同卿佗行中ニ有公然催  
促之道無御座候處八月末ニ到同卿ニハ差  
掛リ候急用辦理ノ為メ終ニ一日歸省被致候  
節右事件取調之任ヲ受居候外務省高務局長  
ヨリ我ヘノ返書ヲ認メ直ニ外務卿ヲレテ記  
名セシメ之ヲ拙者ヘ差越候ハ別紙甲辨之通  
ニ御座候然ルニ右之返書ニ付尚同卿ヘ及討  
論度考意ニ罷在候處同卿ニハ既ニ具翌日再  
ヒ他行被致候故不本意ナカラ同卿ノ歸省ヲ  
相待居候處漸ク過日歸巴被致候ニ付早速外  
務省ヘ出頭我請求之本旨ヲ以久覆細論ニ及  
候末同卿ヨリ結局ノ返答ニ貴国ニテ税則ヲ

自由ニヤントノ義ハ下御氣之毒御請求ニ應  
レカタク候成程道理上ヨリ論スレハ獨立諸  
国ハ何レモ自主之權ヲ有シ居ヘキ答ニハ候  
得共若シ各国ニテ互ニ勝手ニ其国之税額ヲ  
定メ候時ハ貿易更ニ進メス候ニ付近來各国  
共大抵皆貿易條約ヲ取結ヒ此條約上ニテ税  
則ヲ定メ候様相成即於我國モ今日條約ニテ  
税權ヲ束縛セラレ居自由ニ改定スルノ權ハ  
無之候依テ今後貴我兩國之貿易ヲ進捗セレ  
メシカク為メ真相之貿易條約ヲ取結ヒ度愈貴  
国ニテ御同意相成閣下其訓令御受被成候  
ハ早速當地ニテ右ノ高議ヲ始メ結約致度  
トノ事ニ有之候ニ付拙者ヨリ答置候ニハ右

「何レ地方關係ノ件モ有之ニ間於東京結約致  
度我政府ノ内考ニ有之旨一應申述置候尚外  
務卿陳述之詳細ハ別紙乙號ニ御兼知被下  
度候

一白耳義ハ七月上旬拙者同国府へ赴キ彼外務  
卿へモ本件之趣意詳細申述候始末ハ既ニ別  
信ヲ以申上置候通ニ有之其後彼政府ヨリ別  
紙丙号之通返書到來致シ候本月拙者再々同  
国へ相越外務卿及大輔トモ數回面晤仕我請  
求之趣意ヲ辨論シ且彼政府之内情ヲモ兼リ  
候処同卿輔ノ内話ニ我國ニ於テハ可成貴國  
ノ為ノ都合能相運ニ度底意ニ候処英一獨逸  
ノ兩國ヨリ切ニ壓迫ヲ受ケ我國ニテ獨立ノ所

置相成眞候段甚々気之毒ニ存候乍併貴国ヨ  
リ改正之御請求ハ當然之事ト存候間餘事ハ  
後日ニ譲リ先ツ其分ノ及御答置候トノ旨  
咄レ有之候季細ハ別紙丁號ニテ御兼知被下  
度候

一佛白兩外務卿ヨリノ咄ニ「日本ニテ外国人ノ  
内地居住旅行ヲ容易ニシ舊來ノ如ク内外隔  
阻ノ仕向ハ断然無之様相成度」トノ事有之候  
處右邊ノ儀ニ付テハ兼テ訓令無之ニ付不取  
敢拙者一己ノ意見ヲ以テ答置候ニハ右内閣  
ノ儀ハ裁判權ニ関涉致候ニ付我政府ニテ此  
権理ヲ回復致候迄ハ我内地ヲ開キ候事難相  
成トノ理由ト情實トヲ述置候

一元來我ヨリノ請求ハ條約改正殊ニ稅權回復ノ大主意ノ承諾ヲ得度トノ儀申出候處佛、白兩國共的然之ニ對シタル返詞ヲ不致故ラニ迂曲ノ答書ヲ贈リ候ハ全ク英國等ヨリ若政府へ内通シ何レモ一致同意ノ返答ヲ為リントスルノ策ニ係リ及令各國ソ内ニテ我請求ニ應シ度トノ底意有之テモ掣肘ノ患ヲ免レス曖昧依違ノ答書ヲ贈リ候事ト存候一英國ハ我邦トノ貿易上直接ノ關係重多ニ有之候故若シ我邦ソテ海關稅額ヲ隨意ニ昂低スルヲ得マシメ候時ハ將來同國ノ貿易ニ少クナル影響ヲ與ヘ從テ自國ノ利潤相減シ可申殊ニ同國ニテハ近來内國産業ノ道衰

色ノ顯ハシ候モ全ク同國物産ノ賣捌場世界中ニテ追々減少致候故ノ儀ニ有之此上我邦ソテ産業ヲ起サシムルノ緒端相同キ候ハハ益々同國ノ利分ヲ減スルハ必然ニ有之且同國ハ年來東洋諸國ニ對シ常々不當ノ仕向ヲ施ス事ニ于慣レ居候處自リ我國へ定稅ノ權ヲ讓リ候様ノ儀ハ同國施政ノ目的ニモ戻リ加之若シ一旦我邦ニ此權ヲ讓ル時ハ此後東洋外諸國ヨリ其例ニ沿ヒ追々稅權回復ノ事ヲ申出竟ニ之ヲ為メ本國產物ノ賣捌ノ途塞カリ候様ノ場合ニ可列致ト種々ノ憂慮有之旁以我請求ニ應セサルノミナラス且陰ニ他國ニ迫逼リ其同意ヲ妨ケ候儀ニ有之候

一獨逸ハ英国ノ教唆ヲ受ケ其意ニ左祖シ同政  
府ニテハ全ク英政府ノ所置ト同一ニ出ント  
ノ見込ニ有之趣在英ノ獨逸大侯ヨリ英政府  
へ申述候由御同国ニテ斯迄我ノ望意ヲ抗拒  
致候ハ何故ノ事ニ有之哉同國トハ元ヨリ貿  
易上ノ關係モ少キ一故格別異議ハ有之間敷  
ト存居候處半途ヨリ右様ノ異議ヲ起シ候段  
是夕不審ニ存候間高篤ト其原因ヲ探偵可仕  
心得ニ御座候  
一伊太利、澳地利等ノ国ニハ今般ノ儀ニ付貿  
易上實益ノ關係少キノミナラス却テ伊國ノ  
加キハ我邦ニテ輸出税ヲ廢止候得ハ彼利益  
益ハキハ必然ニ候處今日迫返書ヲ猶豫致候

ハ全ク英国ノ迫逼ニ依リ候儀ト存候下候右  
兩國共我公使ヨリ先日來及催促居候間伊國  
ハ近日彼外務卿歸有次第速ニ返書ヲ出候運  
ニ相成居候趣ニ御座候  
一英政府ノ都合ハ先般來上野公使ヨリ追々公  
然辨論及催促尚又拙者當有ヨリ種々ノ方法  
ヲ以て間接ニ周旋仕居共ニアールゴック氏ハ年來  
我邦ノ為メ尽力致居候人ニ付時々來巴ノ節  
面會被政府ノ周旋依頼仕置候近日陰ニ承リ  
候得ハ同國ヨリモ最早不遠返書ヲ出スヘキ  
運ニ相成候トノ趣下候到底満足ノ返答ヲ得  
候事ハ無覺未哉ト存候  
一歐洲諸國近來多クハ貿易ヲ盛大ニセン月為

ノ互ニ貿易條約ヲ結ヒ其條約期限中ハ何国  
モ自由ニ税則ヲ改定スルノ權ハ無之ニ付我  
ニテ税額ヲ自由セントノ權ヲ請求スルヲ肯  
諾不致モ強テ不當ノ所置トハ難中候彼合衆  
国ノ如キハ現ニ歐洲諸国ト貿易條約ヲ結ハ  
ス自國ニ於テ隨意ニ税則ヲ制定致レ居殊ニ  
我邦ニテ輸出税ヲ廢止候得ハ将来同国ノ利  
益ヲ増シ可申見込有之旁我ヨリノ請求ヲ  
承諾致候事ニ候將又露西亞ニテハ俄令我邦ニ  
テ税額ヲ昂低致候共同国ノ為メ實益ノ關係  
ヲ生シ不申加ルニ幸ヒ露英兩國争競ノ機ニ  
會レ候ニ付英國ニ對シ容易ニ我望意ニ同意  
致レ候事ト存候

一英、獨、但、澳等ノ諸国ヨリ返答有之候上ハ高途  
々可申進候得共今日迄ノ事勢ニ就テ相考候  
得ハ到底米、露兩國ヲ除クノ外諸国ニテハ我  
請求ヲ肯諾スルハ無覺末候然ルニ於各國  
断然我請求ヲ拒ミ候時ハ我方ヨリモ從前ノ  
條約破毀ヲ申出ヘキ理有之候ヘトモ於  
彼方唯税則ヲ自由ニ改定シテ一點ノミニ異  
議有之候迄ニテ改正ノ大趣意ニ異議ナキ時  
ハ下殘念右破毀ノ策ニハ出カタク且若レ破  
毀ヲ公告スルニ相成候得ハ具日ヨリ且的  
内外不可言之混雜ヲ生スヘキ顯然ニ付是  
ハ實際不可行事歟ト存候勿論佛、白ノ兩政府  
ハ最初ノ論旨ヲ主張致シ置候得共到底杜

者東京出發前内閣ニテ申上置候通り貿易條  
約ヲ取結候ヨリ他ニ良策ハ有之間敷候弥貿  
易條約ニ御決議相成歐洲ニテ取結候方可然  
トノ席談ニモ候ハ先ツ條約ノ大綱ノミヲ  
約定致シ置細目ニ至テハ地方ノ關係モ有之  
實地ニ就テ取調ヲ要シ候件々可有之ニ付追  
テ於東京高議決定致候ニ可然ト存候尤右御  
決議ノ上ハ尚相同ク御降示被下度因テ  
早急電信ヲ以其模様内々御降示被下度因テ  
暗號電文左ニ相添候  
右之件々一應申上置候敬具

明治十一年十月十八日

特命全權公使鮫島尚信

上取大臣三條實美殿  
右大臣岩倉真視殿  
外務卿寺島宗則殿

電信通牒

貿易條約ヲ取結フヘシト御決議相成候  
ハ、左ノ通り御通報被下度候

*Commerce good*

大藏省

甲號

佛國政府ヨリノ返翰

譯文

去ル五月六日付貴翰ヲ以テ貴國政府ニ代リテ  
 八百五十八年并々八百六十六年ノ通商約定殊  
 ニ貴我兩國ノ間ニ於テカスル產物ノ関税法  
 ニ係ル諸規則ヲ改正ニ欲スル度リノ義御申越  
 之趣致承知候就テハ於本省早速右ノ調査ニ取  
 掛リ未々相濟不申候得共今ヨリ貴政府ノ御目  
 的ヲ扶助セントノ誠願ヲ以テ兩國間通商ノ効  
 ヲ成遂セシムルニキ様ノ場合ニ改正致度トノ意  
 見ヲ閣下ハ一應申進置度存候  
 條約改正御請求ノ助論トシテ閣下ヨリ御申越

大藏省



ニハ海関収税額ヲ増加スルノ方法ヲ難被得ニ  
付貴政府ハ不得已是迄既ニ内國人民ニ重課セ  
ラレシ直税ヲ増シ又他ノ一方於テハ相当ノ  
輸入税ヲ課シテ以テ内國ノ産業ヲ擴張スル  
能ハス且輸入物ノ額ハ輸出物ヨリ超過スルヲ  
以テ常ニ正金銀ヲ輸出シテ其差ヲ平均スルニ  
至リ斯ク日日衰弊ノ加ニ似京况ヲ改復セシガ  
為メ貴國商品ノ輸出ハ發止セラレハキ御見  
込ノ旨御申越候処若シ外國ニ於テ貴國之産  
物ニ課スル所ノ輸入税ヲ減スルノ承諾不致  
時ハ右ノ御方畧モ果シテ目的通り充分ニ相連  
シ候義ハ如何可有之哉ト存候  
尔併右御申越之趣ニ聽者ニ於テ御左之次第ト

相考候間幾分カ御同意致シ度存候得共貴國ニ  
テ我商品ノ輸入ヲ妨ケ候程関税ヲ増加セラレ  
或ハ我商品ニ對シ諸外國ヨリ輸入ノ同品ニ異  
ナル重税ヲ課セラレ候様之豈ハ承諾難致候  
將又我政府ニテ御請求ニ應シ候廉ニ對シ貴政  
府ヨリモ兩國互相ノ盛衰ニスヘキ様之  
御處分可有之ハ至三ニ義ニ存候カモ右ノ御處  
分ハ関税ヲ減セザルニテ却テ貴政府カ  
税權回復ノ御望ニ叶ヒ收税ノ額ヲ増加スヘキ  
者ニシテ即開化諸國ノ間ニ組成セル真誠堅固  
ナル通商事業ノ利益ヲ貴我兩國ニ於テ享有セ  
シトスルノ方法ニ有之候而ノ其事タルヤ貴國  
内地ニ於テ可成外國人ノ居住旅行ヲ容易ニシ

内國ノ農業礦業其他諸産業等ニ関係スルテ  
許可シテ之ニ従事スルヲ得セシメラレ且政  
洲諸國ノ貿易上ノ條理ト意想トテ内國人民ニ  
開示セラルル義ニ有之候  
如此ク全ク寛裕ノ趣意ニ相成候得ハ第一貴國  
政府ハ其人民ノ利益ヲ補助シ且閣下ヨリ御申  
述ノ會計上困難ナル場合ヲモ安全ニ改復シ得  
ハキ義ト存候  
該件ニ付本省見込ノ次第ハ尚追テ可及御商議  
候得共前文ノ義ハ貴政府之御意見ニ相叶可申  
哉否致承知度候尚又東京朝廷ニ於テハ我國ニ  
テ貴産物ノ輸入税ヲ如何様ニ輕減シ又貴國ニ  
テ我高品ノ輸入税ヲ如何様ニ増カ被成度トノ

御見込ニ候哉尚其望ヲ承知致度不堪懇請候  
敬具  
千八百七十八年八月三十日於巴里  
ワジントン

鮫島公使

乙 號

佛國外務卿ト最後談判ノ節同卿陳述ノ主旨  
旨撮記

貴我兩國ノ條約重修殊ニ貴國海関稅權回復ノ  
義ニ付先般御書翰御出被成候後寫ト熟談及  
候上我政府ノ意見以テ御書翰返答致置候事ニ御  
座候以貴國ニテ海関稅則并貿易章程等ヲ貴  
政府ニテ適宜ニ御定被成候事不相成且今日施  
行ノ稅則ハ貴國ノ為メ不都合ノ慮不少ニ付此  
度石稅則ヲ改定スルノ推理ヲ御回復被成度ト  
ノ御見込之段致承知候成程獨立國ナレハ何レ  
モ勝手ニ其國海関ノ稅額ヲ制定スルノ權利ハ

固有致居候筈ニハ候得共御存ノ通り即今ハ世  
界ノ貿易段々昌盛ニ至リ候様ノ方去テ謀リ候  
進路ニ入り候時節ニ有之候然レニ諸国ニテ各  
自隨意ニ其海關ニ輸入スル外國商品ニ課スル  
税法ヲ定メ候時ハ自ラ保護ノ趣意ニ陥リ貿易  
次第ニ却歩之勢ニ相成連モ盛大ニ赴クハ道  
無之候故近來ハ歐洲諸国ニテ貿易條約ノ詭大  
ニ擴張シ各國共互ニ貿易條約ヲ結ビ候様相成  
即於我國モ亦國ヲ除クノ外歐洲諸国トハ大抵  
不殘貿易條約ヲ結ビ其国ニ對シテハ條約ノ  
年限中ハ彼此ノ間ニテ決定ノ税則ヲ守リ居我  
邦ニテ自由ニ昂低スルヲ能ワサル様ノ次第ニ  
御座候間此度貴國ニテ決定税之權ニ御回復被成

度トノ御望通り御伺思ハ御氣之毒ナカラ致兼  
候  
乍併過日御差出之貴翰ノ意味并物語ノ節ニ御  
陳述之事情等ヲ篤ト相考候處今日貴國ヨリノ  
御請求ハ如何ニモ御尤ノ事ト存候間我政府ニ  
テハ可成文ケ御請求ニ應ジ貴國ノ為メ都合ヨ  
ク様御相談ニ及度積ニ御座候  
就テハ貴國ノ御意ニ幾合カ相達シ且貴我兩國  
之貿易ヲ盛昌ニ進メ候様相導キ候ニハ兩國間  
ニテ貿易條約ヲ結ビ候ヨリ外無之ト存候貴政  
府ニテ御同意相成候ヲ貴國ノ輸入ノ我商品ニ  
課スヘキ税則并ニ我國ノ輸入ノ貴國商品ニ課  
スヘキ税則等ノ身ニ付テハ何レ貴國ヨリノ御

望ニ可有之候間可成丈々貴國ノ御望ニ應シ兩  
國ニテ五相ノ利益ヲ得候様ノ方法ニ非定メ度  
存候  
貴政府ニテ右ノ貿易條約ヲ取結フヘシト御決  
定相成候ハ、我國ニテハ何時ニテモ差支無之  
候間閣下貴政府日ノ訓令ヲ御受被成次第早  
速取掛リ可申候  
此度ノ條約改正ハ先於東京取計ニ度トノ御  
内考之趣閣下ヨリ御咄有之候得共我國ニテハ  
從來右様ノ條約ハ多ク巴里府ニテ取調来リ掛  
リノ官真ニモ其事ニ于慣居候間可成ハ當府ニ  
於テ閣下ト御商議ノ上決定候様致シ度候ト併  
外各國ニテノ振合ニ有之ニ付何レ追テ御相

談ニ及ヒ如何様ニ是處方之都合ナリ様可取計  
云候

丙號

白耳義政府ヨリノ返翰

譯文

以書翰致敬上候陳、去ル七月十日付貴翰ヲ以テ貴國政府ヨリ閣下へ御付與ノ訓狀寫御差出相成且右訓狀ノ主意御解罷之趣致并見候右と據レハ貴國政府ハ千八百六十六年八月一日ノ條約改正ノ目的以テ我政府ト御商議被成度トノ御望ニ付即我國王へノ伺ヲ經候上於我政府貴我兩國間ニ現存スル條約ヲ改正マントノ大意ハ致承諾候就テハ我政府ニテハ國人ノ幸福ハ經濟上寛裕ノ本旨ヲ實施スルニ因ル者ト相考候間於貴政府モ通商新條約ノ論理ハ右ノ

主義ヲ御採用可相成ト致信用候將又右新條約  
ノ商議并實施ニ付我國ノ孤立ノ弊ニ不相成  
様致度望意ハ云ヨリ貴政府ニテモ御同意可被  
降参ト疑ヲ容レズ候此段回答申進候敬具  
千八百七十八年九月九日  
フレスブル  
ブルボン

鯨島持命全權公使閣下

丁號

白耳義外務卿ト最後ノ談判ノ節同卿  
陳述ノ主旨撮記

貴我兩國之條約重修之義ニ甘先般御差出之御  
書翰ニ對シ拙者ヨリ差進候返書ノ趣ハ疾ニ御  
承知被下候事ト存候云云於我政府ハ貴我兩國  
ノ貿易上將來之厚害ヲ生セサル迄ノ事ハ可成  
貴政府ノ御望通り御同意可致底意ニ罷在候處  
如何セシ我國ハ御存之通りノ國柄ニテ外各國  
ハ對シ不羈獨斷之所行致シカタク且本件ニ付  
テハ或ル因々ニテハ日本國ニ於テ條約改正ヲ  
請求スヘキ權利ハ無之杯ト申様ナル議論モ有

大藏省

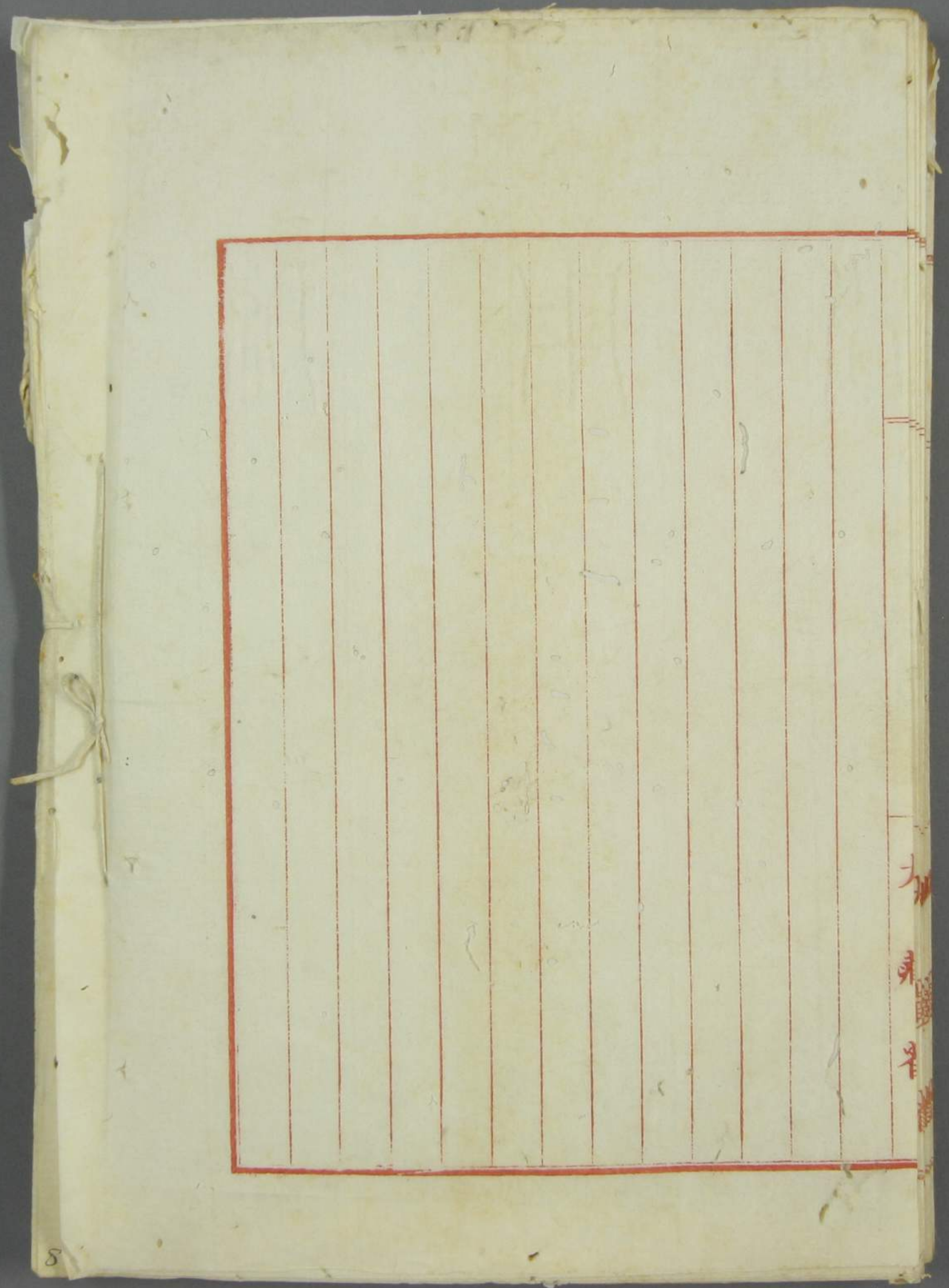
之候得共我政府ニテハ到底條約ヲ改正スルハ  
可然ト存候ニ付他ノ細項ハ後日ニ譲リ先ツ改  
正ノ義ヲ御同意致候事ノミ御答致置候尚今後  
改正之高議ニ付テハ可成丈ケ貴國ノ御望ニ叶  
ヒ候様相運ニ度心得ニ御座候

同國外務大輔ヨリ内話ニ云

此度ノ一件ニ付テハ我國不可成貴政府ノ御満  
足ニ相成候様之返書ヲ差進度本意ハ御座候慶  
英獨逸ノ二國ヨリ切ニ我政府ハ迫ラレ右兩國  
ヨリハ我政府ヨリ可差進返書ヲ見ヤ吳ヨト申  
来リ尚又當府在留ノ獨逸公使ヨリノ咄ニ同國  
ニ於テハ日本ニテ其國ヲ開カサレハ改正ノ義

ハ承諾セサル積ニ有之ト述申居候且獨逸在留  
ノ我公使ハ先日態ニ此一件ニ付歸國致シ候様  
ノ次第ニ付我國ノ本意ヲ以テ獨立ノ御返答難  
申進段御氣之毒ニ存候云々





九  
第  
卷